

【青葉区民会議 自然・環境部会 観察会】奈良川源流と保存緑地の観察調査

日時 平成26年5月23日(金) 10時～12時

参加者 加茂、衣笠、小杉、鈴木、福島、福田

目的 周辺住民に豊かな自然環境を提供してくれている樹林と奈良川の流れの源流は、玉川学園に源を發し、学園内の豊かな樹林は横浜市と緑地保存協定が締結されており、これらの現状を観察して緑地保存・水源確保の課題と対策を考察する

青葉区と玉川大学は、六大学連携事業の協定を結んでいることもあり、今回の観察会には玉川学園総務部より特別のご配慮をいただきました。
また、玉川学園元教諭の佐藤邦昭氏にご案内いただきました。

玉川学園と緑地保全

小原國芳さんが1929年に玉川学園を創立された当時の自然林が多く残っている(下図)。また、その当時、学園の周辺には水田が広がって住宅地はまだ開発が進んでいなかったそうである。
小原氏は豊かな自然の中でこそ偉人は生まれるとの考えから、自然環境保護に積極的に取り組み、現在でも校是として引き継がれているとのこと。

これを受けて、1980年2月横浜市との間で緑地保全協定が締結されました。学園は、横浜市と町田市、川崎市にまたがるが、敷地のうち横浜市内に位置する殆どの面積が協定区域となっています。



緑色の濃い部分は自然緑地、
薄い部分は造成緑地を示して
いる

調査ルート

下図に示すように、正門(集合)→玉川学園東口→緑地保存協定掲示板→谷戸湧水源頭→奈良池・源頭→経塚山→玉川学園裏口→TBS協定表示板(解散)



(青葉区防災マップに加工)

キャンパスをぬけて、玉川学園と横浜市の緑地保存協定掲示板の前で佐藤氏の説明を聞き、記念体育館裏手の源頭を経て東山を巻くルートに入る。

たまたま畑で農業体験の授業を受けている小学生を見かけました。

佐藤氏によれば、校歌「星あおき 朝に学び 風わたる 野に鋤振う かくて我ら 人とは成らん」にある通り、小学生の授業の中にも畑の整地、また野菜の種蒔きから収穫までの一連の世話や農作業、あるいは樹林地の下刈りをするなど、さまざまな体験活動が組み込まれており、子供たちに『自然と人のつながりの大切さ』を意識づけ深めるための学習が行われているとのこと。

奈良池への道は、前日の雨でやや滑りやすいところもあったが、蛙の鳴き声、鶯、ホトギスの啼き声、チョウゲンボウの姿を楽しみながら奈良池に達した。満々と水をたたえていて神秘的な感じさえ感じられた。

記念グラウンドのように大規模の施設を造成するときには、貯水池を併設する規定となっている。、これがまた新たな緑地を提供しているが、創設以来雨水が貯まったことはないとのこと。丁度ルート観察中、水質調査の係員が中に入っていた。

これらの緑地が奈良川源流の主となっている。

学園の外部にも、この付近には、TBS(東京放送((株))とモアクレストマンションとの緑地保存協定地と源流の森保存地区などがあり、奈良川の源流域を形成している。(自然・環境部会調査)

ルート上のスナップ写真



正門前に集合



協定表示板の前で



谷戸の湧水、源頭



説明を受ける一行



奈良池の湧水、源頭



奈良池



水源の森保存地区標



奈良川源流域の出口



TBSとの緑地保存協定標識

緑地保存と水源確保の課題と対策(参加者の感想とともに)

- ①樹木の寿命を考慮しての保全と学園内での建物の増設と樹林地保存のバランスをとること。
- ②道路計画 (出展:<http://www.city.yokohama.lg.jp/doro/plan/minaoshi/soan-ku/13aoba/>)
柿生町田線については、計画地の一部が、「横浜市水と緑の基本計画」の中で、緑の七大拠点に位置付けられていること、「青葉区まちづくり指針」における、「水と緑の軸」に位置付けられている奈良川と周辺の緑地に道路計画されていることから、廃止または線形変更することが望ましいと考えられている(工事時期は未
奈良1号線については、計画地周辺が「横浜市水と緑の基本計画」の中で、緑の七大拠点に位置付けられていること、「青葉区まちづくり指針」における、「水と緑の軸」に位置付けられている奈良川と周辺の緑地に道路計画されていること、また、奈良北団地内の現道のバス通りが交通機能を代替できるため、「廃止」となった。
- ③奈良池の環境悪化をくい止め、保全を図るには規制強化と啓蒙が不可欠である。
- ④奈良川源流域全体の保全が重要である。
- ⑤学園内にこんなに多くのみどりが残っているのは、リーダーの志の高さなのだと、ひたすら感心した。
- ⑥玉川学園からTBSまでの下り道の右手の緑(土橋谷戸)も良かった。ただ、玉川学園での保全状態に比べて、「この緑は何時まで持つのかな?その内、宅地になるのかな?」と考えながら歩いた。

あとがき

佐藤氏の懇切なるご案内に感謝申し上げます。
以下に佐藤氏のご活躍の一端をご紹介します。

『全人』2013年9月号 No.775より

幼稚部親子会の丘めぐりでは、毎回楽しく案内役をつとめさせてもらっています。(略)

花びらを拾って見せると、「ほんとだ。たくさんの花びらが上からも落ちてきているよ！」と、お父さんお母さん。すると皆いっせいに木を見上げ、「ほんとだ」。子どもたちも気づいて驚きが皆に伝わっていきました。

レイチェル・カーソンは著書『センス・オブ・ワンダー』で、子どもたちが自然への驚きや神秘を感じるセンスを培うには「子どもと一緒に再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、少なくとも一人、そばにいる必要があります」と語りました。必要なのは自然の「知識」ではありません。ていねいに物を見て、その美しさや不思議さに感動できる心。そして、その感動を子どもと共有できる場をもつこと。これが親や教師の役割ではないか、このように私は考えています。



玉川学園で理科教育に携わりながら、草笛や草花遊びの指導や著作活動を行う佐藤邦昭先生

「子どもと感動を共有できる大人でありたい」 p14 佐藤邦昭

http://www.tamagawa.jp/serial/zenjin/detail_6280.htmlから

以上